新収蔵資料の紹介

長野県近代史料

古書店から購入したもので、史料点数は15点。納品時には「長野県資料一括」という名称が付けられていた。

すべて長野県に関わるものだが、おもに二つの史料群に大別できる。ひとつは明治9年（1876）から明治11年（1878）の長野県布告で、大日方直恕という人物が所有していたもの。もうひとつは埴科郡屋代町（現、長野県千曲市）の白石源三郎という人物が所有していた屋代町に関わる史料で、屋代町議会の議案、屋代町を含む埴科郡内7ヶ村の共有沢山をめぐる訴訟史料などが含まれる。そのほかに上高井郡山田温泉の分析表と効能書、真宗本願寺派洪道教会規約條例など、出所がはっきりしない史料も含まれる。

15点とも冊子形態で、うち12点の表紙に「禁門出 治三郎文庫」の印が捺されている。印のない3点も他の史料との関連が認められることから、すべて治三郎という人物が収集し所蔵していた史料群であると考えられる。

遠江国豊田郡友永村御伝馬御用留

明治2年（1869）の助郷に関する友永村（現、静岡県袋井市）の御用留1冊を古書店より購入した。

友永村は明治元年（1868）12月、明治政府の伝馬制改革により見付宿の助郷村に指定されている（『磐田市誌シリーズ第二冊 東海道遠州見付宿』）。本史料は、明治2年（1869）正月から翌明治3年（1870）正月までの助郷関係の触を書き留めたもので、とくに人馬徴発については実際に出勤した人足数も記載されている。後半部分には人足を出す代わりに見付宿へ支払った金額等も書き上げられており、助郷に関する友永村の一年間の負担全体がわかる。また、見付宿伝馬所の役人が年寄から人足指・馬指まで書き留められており、当時の見付宿の全構成員を知ることができる。

旧東海道宿場町写真

江戸時代に東海道の宿場町があった土地を撮影した写真15点で、古書店から購入した。写真の大きさはいずれも縦5.4cm×横8.5cmほどで、6.0cm×9.9cmの台紙に一枚ずつ貼られている。撮影場所は川崎、神奈川、箱根、三島、吉原、静岡、藤枝、金谷、浜松、豊橋、熱田、桑名、四日市、関、大津で、台紙の裏に毛筆で「東海道川崎」のように地名が記載されている。全体にかなり色あせているため確認しにくいが、写真の画面にも地名が焼き付けられている。

15枚のうち豊橋の写真は、明治2年（1869）に架け替えられた豊橋（とよばし）を、船町側から対岸の下地方面を望む構図で撮影されたものである。この橋は明治26年（1893）に新しい橋に架け替えられていることから、撮影された年代をこの間にしぼり込むことができる。また、川崎の写真には既に複線化された川崎駅の様子が写っていることから、川崎駅の複線化が完了した明治12年（1879）以降に撮影されたものであると確定できる。15枚の写真はセットで販売されていたか、または同一シリーズのものと思われるので、いずれも明治10年代から20年代頃に撮影されたものと推測される。